

# 生涯発達の視座から見る 胎児期・乳幼児期の重要な役割

遠藤 利彦

(東京大学)



The Center for  
Early Childhood Development,  
Education, and Policy Research

<https://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/>

# 生涯発達の始原なる胎児期

—胎児期・妊娠期からの持続的サポートの大切さ—

- ヒトの育ちの始まりをいつと考えるか？
- 出生時→受精時：胎児期から始まる学びと教え
- 胎内環境・経験が人の生涯に対して有する意味  
[cf. エコチル調査]
- 時間軸上に連綿とつながる「線」に寄り添う
- 地域単位での出生前の胎児期からの一貫した切れ目ない持続的・包括的サポート [cf. ネウボラ]
- 殊に虐待予防は、現実的な相互作用が発生する前、胎児期から開始するのがきわめて効果的

- 生涯発達における胎児(妊娠)期の重要な意味
- DOHaD仮説(成人疾病胎児期起源説:胎児プログラミング説)  
Developmental Originals of Health and Disease 「予測適応反応」
- 胎内環境:栄養・ホルモンシャワー・テラトゲン…  
[→ “epigenetics” (後生遺伝学)等の関与]  
→胎児発生・成長過程を大きく左右 (→ハイリスク)
- 胎内環境は妊婦の心身状態・生活習慣およびその外側の社会文脈的要因に左右される
- 低体重・早産等のハイリスク児は出生後に二次的・三次的にさらなるリスクに巻き込まれやすい
- 妊娠中の母親の「未だ見ぬ子」に対するイメージ・表象は出生後の養育や子ども自身の発達を有意に予測する

- **出生後の養育パターンの質変化は小さい**

出生段階で親がどのような養育を子に対してなすかは、かなりのところ決まっている

- **妊娠期あるいはそれ以前からの子育てに向けた夫婦連合とそれを外から支え得るネットワーク**

(e.g. ネウボラ: 妊娠期からの持続的・包括的サポート)

- **子育ては妊娠期から始まる [スタートが肝心!!]**

→ 胎内環境を健全に保つことの重要性 (DOHad仮説)

→ 母親のまだ見ぬ子との「対話」の重要性

→ 父親が頼りになる養育者となるための準備

妊娠中からの子育てに関する夫婦の会話

→ 誕生後の親の養育行動や子の発達を予測

→ “Maternal gatekeeping”の弊害を予防

- **東大Cedep×ベネッセ共同研究**

- 「乳幼児の生活と育ち」研究プロジェクト**

- 全国の2016年度生の子どもをもつ保護者3,205組に関する縦断調査

- **シンポジウム**

- 2019年**

- 「新しい時代の“チーム育児”を考える～子どもの発達と養育環境に関する縦断研究より」

- 2021年**

- 「乳幼児期の社会情動的発達を支える子育てとは？」

# 調査デザイン

Cedep × ベネッセ教育総合研究所  
「乳幼児の生活と育ち」研究プロジェクト

社会科学研究所 × ベネッセ教育総合研究所  
「子どもの生活と学び」研究プロジェクト



11

## 主な項目

12

### A. 子どもの気質や生活

出生時の状況  
子どもの気質

〈睡眠〉起床、就寝時刻、午睡時間

〈保育〉就園状況(園種別、時間)

〈メディアや遊び〉1日の時間

〈習い事〉

### B. 子どもの発達

粗大運動、微細運動  
言葉、社会性  
アタッチメント

### C. 親のwell-being等

子どもに対する気持ち、子育て親

子育て肯定感・否定感  
子育ての悩み  
主観的幸福感  
ストレス、抑うつ、親性  
配偶者との関係

### D. 親の養育行動や生活

【妊娠・出産期】  
妊娠期の生活習慣、情報収集  
妊娠期の夫婦関係  
出産体験、出産後の状況

【子育て期】  
〈生活・子育て〉  
養育行動  
生活時間(家事・育児・睡眠等)

〈社会〉  
子育てのサポート  
社会に対する評価、要望

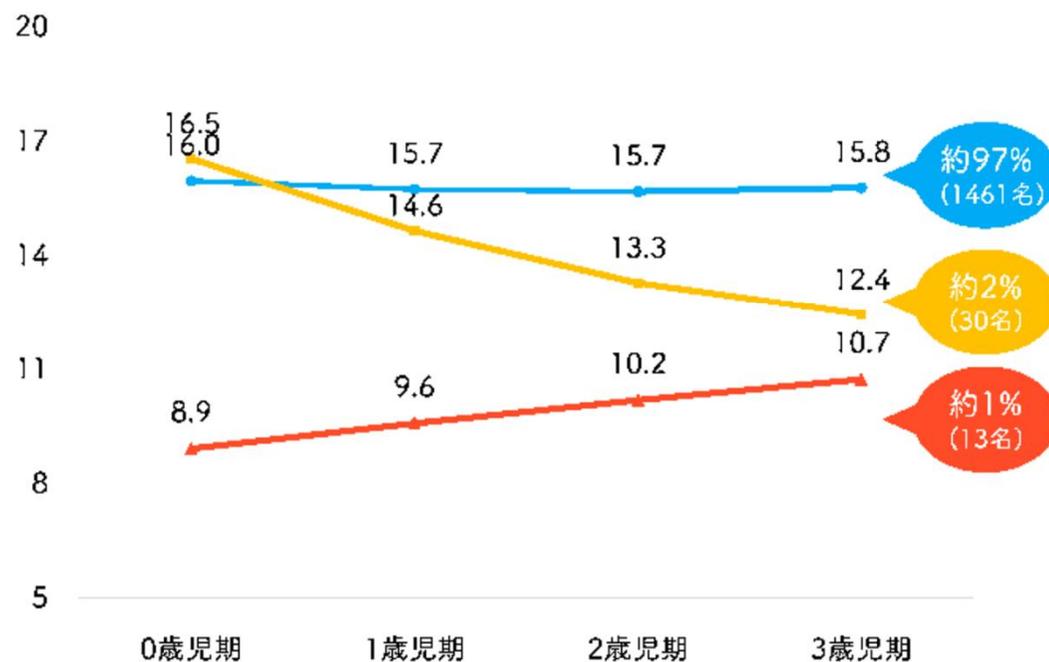
〈夫婦〉家事・育児分担比率

〈職場〉職場環境

### E. 基本属性

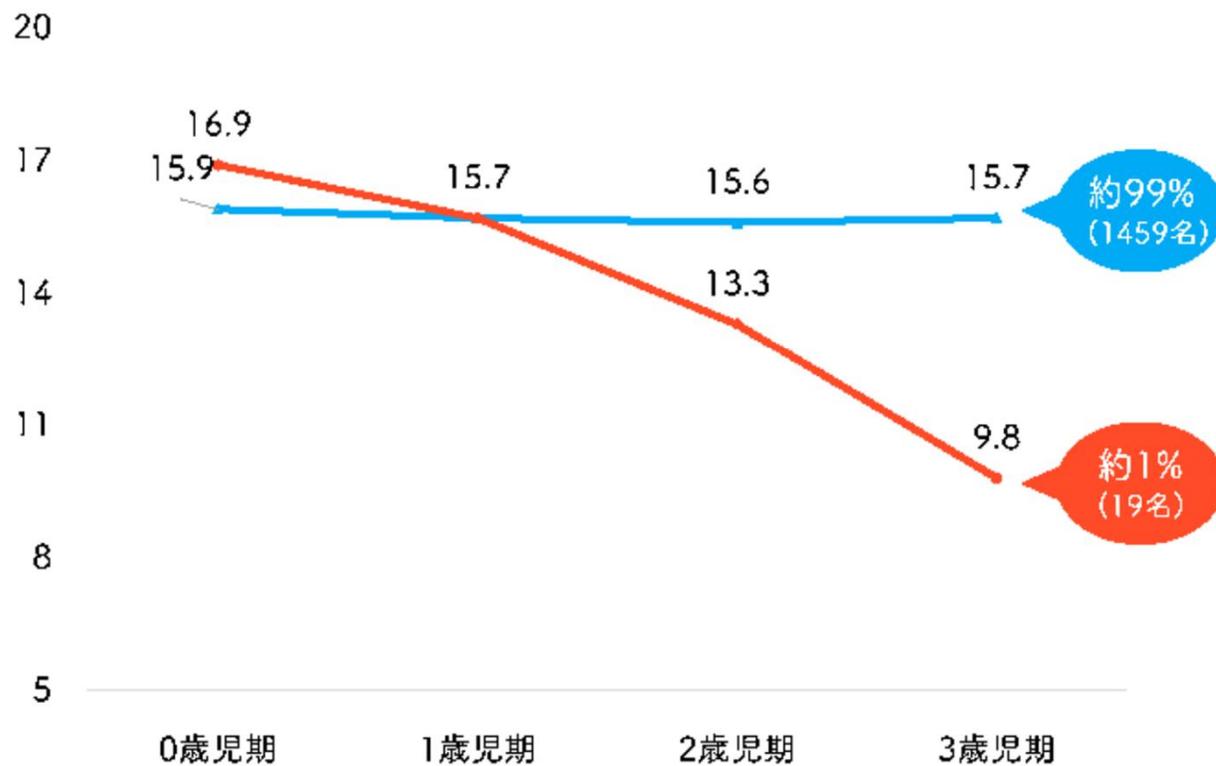
子どもとの関係、子どもについて(性別、生年月、きょうだい数、出生順位)、配偶者(同居・離死別)、回答者の属性(年齢、学歴、就業形態・日数・時間、帰宅時間)、世帯収入、育児希望と理由

### 母親の子育て肯定感の変化パターン



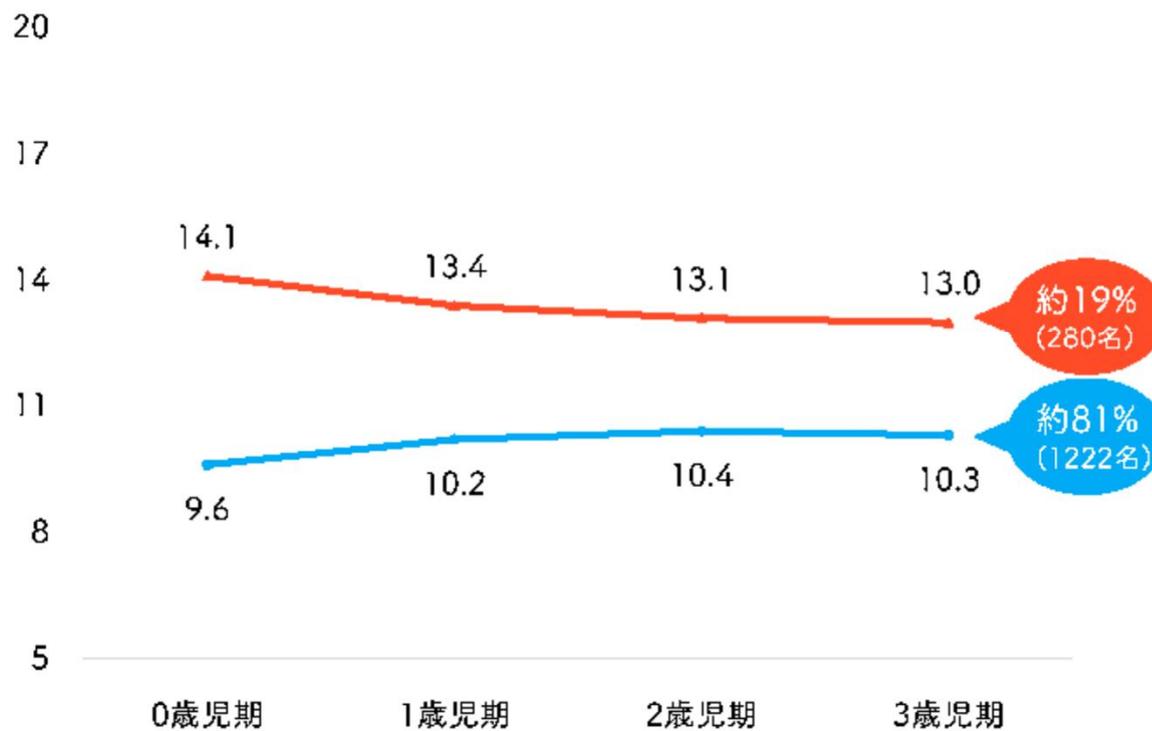
※合計得点の平均値。最小値5-最大値20。成長混合モデルの適合度を考慮してクラス数を決定した結果

### 父親の子育て肯定感の変化パターン



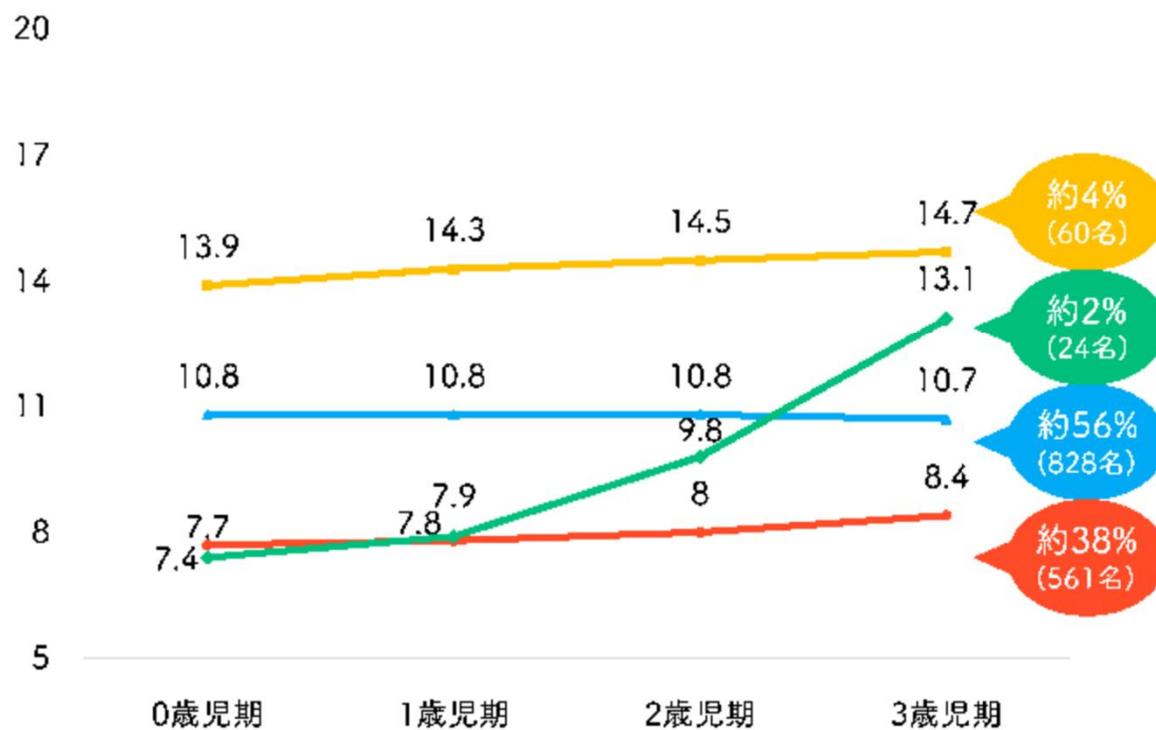
※合計得点の平均値。最小値5-最大値20。成長混合モデルの適合度を考慮してクラス数を決定した結果

### 母親の子育て否定感の変化パターン



※合計得点の平均値。最小値5-最大値20。成長混合モデルの適合度を考慮してクラス数を決定した結果

### 父親の子育て否定感の変化パターン



※合計得点の平均値。最小値5-最大値20。成長混合モデルの適合度を考慮してクラス数を決定した結果

9

- 制度面でのWLB促進や男性の「育休」「育業」取得への取り組みはある程度進みつつある
- コロナ禍の状況において、男性・父親側の仕事・家庭に対するへの意識にも変化が生じてきている
- 現実的な寄与につながる育児・家事スキルの不足  
“maternal gatekeeping”: 母親側の「気持ちうれしいが、かえってじゃま」  
→ 妊娠期からの夫婦の会話・具体的な準備の重要性
- 「家庭・仕事」両立を阻む社会的状況  
→ 個人・家庭・職場・社会の抜本的な意識変革  
「育ボス」の育成・職場風土の改善……
- 育児と仕事の間的好循環の実現→“well-being”

Cedep × Benesseシンポジウム(2021)資料より

gate-keeping 「門番」



gate-keeping ⇔ gate-opening

まとめ



実態として、それなりに多くの男性がgatekeep  
されていると感じている



gatekeepは夫婦関係の良さと密接に関連する  
(夫婦関係がよいと、gatekeepingの程度は弱まる)



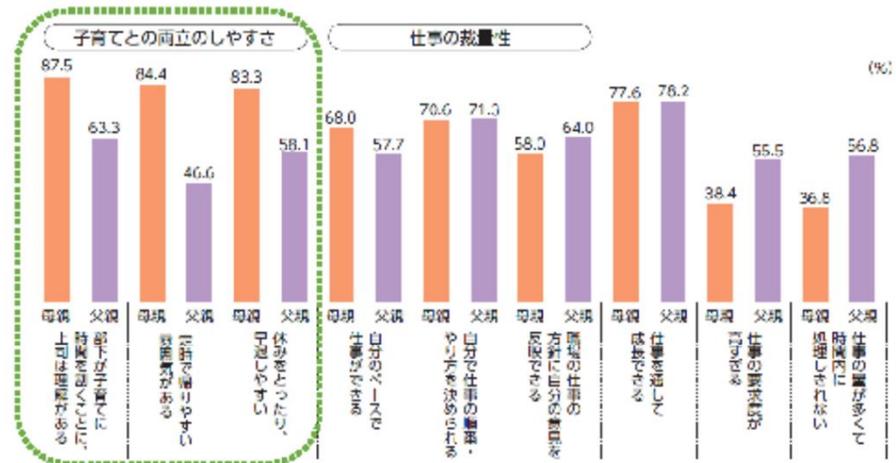
妊娠期の話し合いや女性の精神的な健康が  
gatekeepと関連する可能性がある(低くなる傾向あり)



gatekeepされていると男性が思っていることは  
男性のネガティブなアウトカムと関連する  
(子育て肯定感や精神的健康の低さなど)

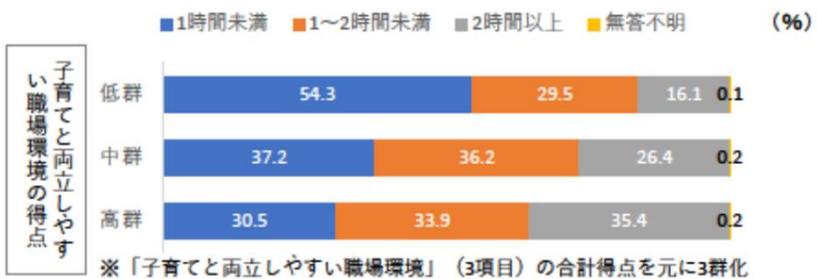
平日の父親の子育て時間と関わる、職場環境 12

● 職場環境(1-2歳児期、有職者)



※就業状況が「休職中」を除く、「その他」を除く、母親の母親 1,224 人、父親 2,005 人の回答 ※「とてもあてはまる」+「まああてはまる」

● 父親の平日の子育て時間(有職者・子育てと両立しやすい職場環境得点別)



# 長期縦断研究が示唆するもの

—乳幼児期における「非認知の土台形成」の大切さ—

- **日本における縦断コホート調査の例**
- 川崎プロジェクト
- ベネッセ・家庭教育縦断調査
- 慶應義塾大学・日本こどもパネル調査
- JST・すくすくコホート縦断調査 Japan Children's Study (JCS)
- 保育コホート研究
- 子どもに良い放送プロジェクト                      etc.
- **子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)**
- **21世紀出生児縦断調査**
- **Cedep×Benesse 「乳幼児の生活と育ち」 PJ**

## ● 世界における長期縦断研究の例

- アタッチメントの連続性・非連続性に関する30～40年に亘る長期縦断研究(米独中心)
- 遺伝と環境の相互規定的影響・エピジェネティクス等に関する双生児研究(欧米圏中心)
- 精神障害の発生に早期経験が及ぼす影響を問う発達精神病理学的研究(e.g. Dunedin)
- 特異な歴史的状況下に置かれた特定コホートの長期追跡調査(e.g. 大恐慌)
- 子どもを取り巻く家庭内外の保育も含めた環境全般の発達の影響を問う総合型縦断研究(e.g. NICHD, EPPE) [東大Cedep]
- **Natural Experiment**: 非定型的な養育環境に置かれた剥奪児に関する縦断研究(e.g. BEIP)
- **Experiment**: 特定の早期介入の長期的効果の検証を目的にした追跡研究(e.g. Perry, Abecedarian……) etc.

- **子どもの発達と教育をめぐる世界的動向**

(発達心理学・小児科学・幼児教育学・教育経済学・OECD諸国の教育政策……)

- 見直されつつある「乳幼児期」の重要性

- 生涯発達の土台形成：高度な学校教育も確かな「土台」の上に積み上げられてこそ益をなす

- 見直されつつある「非認知」の大切さ

- Well-beingに至る基礎工事＋「認知」「学力」も「非認知」の支えがあってこそ確実に伸張する

- 「非認知」の中核→自己と社会性の心の力

- それを育む揺籃としてのアタッチメント

- OECDレポート(2015)が掲げる「非認知」  
“Skills for Social Progress : The Power of Social Emotional Skills”
- 「認知」「非認知」スキルが予測する多様な心理社会的適応
- 所得は「認知」だけでは説明され得ない→「非認知」の重要性
- 「非認知」→「認知」の因果関係は“robust”: その逆因果は×
- ターゲットとする「非認知」=「社会情緒的」スキル
- 個人および社会における生産性への寄与が期待されるもの・成長可能性が見込まれるもの・測定可能なもの
- 「長期的目標の達成」 / 「他者との協働」 / 「感情の管理」
- 「スキルがスキルを生む」(Skills beget Skills)
- 殊に社会情緒的スキルの土台を就学前期に築くことの重要性  
→ **“Starting Strong”** 「人生の始まりこそ力強く」

# 自己と社会性の力≡「非認知」

- 「**自己**」にかかわる心の性質（→長期的目標の達成）  
（自分を大切にし、適切にコントロールし、もっと高めようとする力）  
「自尊心/自己肯定感」・「自己理解」・「意欲/内発的動機付け」  
「自己効力感」「自制心/グリット」・「自立心/自律性」 など
- 「**社会性**」にかかわる心の性質（→他者との協働）  
（集団の中に溶け込み、人との関係を作り維持していくための力）  
「心の理解能力」・「コミュニケーション力」「共感性/思いやり」  
「協調性/協同性」・「道徳性」・「規範意識」 など
- 両側面に関わる「感情の管理（制御・調節）」  
（異時点間選択のジレンマ / 自他間選択のジレンマ 解決）

- 国立教育政策研究所・プロジェクト研究
- 非認知的(社会情緒的)能力の発達と科学的検討手法についての研究  
[http://www.nier.go.jp/05\\_kenkyu\\_seika/pdf\\_seika/h28a/syocyu-2-1\\_a.pdf](http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-2-1_a.pdf)
- 社会情緒的コンピテンス調査に係る分析結果報告書  
[http://www.nier.go.jp/05\\_kenkyu\\_seika/pdf\\_seika/h30/h300327-01.pdf](http://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h30/h300327-01.pdf)

令和3年度文部科学省委託

# 「非認知能力に関する保育・幼児教育施設の意識や取り組みと園児への影響に関する調査研究」

<https://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/survey/mext-non-cognitive-skill-2021/>



- 「非認知的な心」の大切さ
- 世界各地で展開される長期縦断研究→発達早期に基盤形成される「非認知的な心」とそれを支え促すアタッチメントを核と高質なケアの枢要な役割を示唆
- 「非認知的な心」=社会情緒的スキル=自己と社会性の力  
→経済的安定性なども含めた生涯に亘る心身の健康・心理社会的適応性や“well-being”を予測  
→貧困から被り得る様々な悪影響に対するバッファー
- 「非認知的な心」→主に感情の当事者である際の子どもへの周囲の大人の関わりと、子どもの自発的な遊び/学び(一人遊び・集団遊び)の中で醸成される

- 欧米圏中心に貧困層の子どもに対する様々な教育支援がなされ、その効果検証もなされている
  - しかし、単なる経済支援や学生向けの融資プログラムは中退の抑止にはほとんどつながらない
  - “Upward Bound Program”の失敗
  - 相対的にIQが高く早期段階の成績も優秀な子どもが、経済的困窮以外の理由で卒業できない
- 感情制御・self-control等≡「非認知」の不足
- 逆に貧困層の子どもにおける幼少期の非認知的な心の育ちは、その後の成績低下に歯止めをかける可能性あり (e.g. 英国縦断研究/箕面市調査…)

# 発達揺籃たるアタッチメント

—「非認知」の基盤たる自他への信頼・探索の重要性—

# 生涯発達の鍵となるアタッチメント

- 子どもは容易に怖がる・不安がる存在
- そして泣きながら身近な誰かにくっつくようとする
- くっついて安全感・安心感に浸ろうとする

## = アタッチメント

単なるスキンシップ(皮膚接触)とは異なる

- 一日に何回も繰り返される至極当たり前のこと
- しかし、これがいかに確実に安定して経験できるかが、生涯に亘る心身の健康な発達の鍵になる

- *Attachment* = 何らかの危急時あるいは危機が予期された時に生じる恐れや不安等のネガティブな情動を、特定他者への近接性の確保を通して制御・調整しようとする行為傾向(→心理行動/神経生理的制御機構)
- 一者の情動の崩れを二者の関係性によって制御  
外界と内界の間にあって「緩衝帯」として機能
  - 特定他者への近接を通じた「安心感」の回復・維持
  - 保護してもらえることへの確かな「見通し」
  - 「見通し」に支えられての自発的「探索」
  - 「一人でいられる能力」= 自律性の獲得・拡張

「安心感の輪」(circle of security)

## 『安心感の輪』

- …→ 危機との遭遇
    - ネガティブな情動経験(恐れ・不安・欲求不満等)
    - 「安全な避難所」への近接(アタッチメント)
    - ネガティブな情動の調節 / 情緒的燃料補給
    - 「安心の基地」からの探索・遊び
    - 危機との遭遇…
  - この輪がいかに自然にかつ確実に機能し得るか
    - 子どもの健やかな心身の発達のカギ
  - 子どもの成長＝徐々にこの輪を広げること
    - 「一人でいられる時間」の拡張
- 「避難所」:感情を立て直す / 「基地」:探索を促す

- ・ **「安全な避難所」**としての大人の役割
- ・ 崩れた感情に寄り添い、共感的に受け止め、それを言語化する  
→心の理解能力・共感性・思いやり・向社会性……
- ・ 崩れた感情を立て直し、安心感を回復させる  
→自分や他者への基本的信頼  
「自分には愛してもらえる価値がある」「他人は信じていい」  
→自律性・心のたくましさ  
「何かあったらあそこに行けばいい」という見通しに支えられた自発的な探索や冒険・新しいものへの挑戦

- ・ **「安心の基地」**としての大人の役割

- ・ 安心感を得て、元気になった子どもを自分のところに留めておくのではなく、その背中を押して、また一人で探索や冒険に向かって行けるように応援し、離れたところから見まもってあげる
  - 自発性や主体性・意欲や内発的動機づけ・自己効力感・・・
  - 自律的・自発的な発見・探索を通した「遊び/学び」

# アタッチメントと心理的発達

## 「安全な避難所」の二重の役割

- **感情の調律・映し出し** (attunement/mirroring)  
子どもの感情に共感的に反応し、映し出す  
→ 心的理解・共感性・向社会性・自己意識・自己概念等
- **感情の制御・立て直し** (regulation)  
子どもの崩れた感情をなだめ、回復させる  
→ 自他への基本的信頼・自律性・レジリエンス等

# 自己と社会性の力≡「非認知」

- 「自己」にかかわる心の性質（基盤としての自己信頼）  
（自分を大切にし、適切にコントロールし、もっと高めようとする力）  
「自尊心/自己肯定感」・「自己理解」・「意欲/内発的動機付け」  
「自己効力感」「自制心/グリット」・「自立心/自律性」 など
- 「社会性」にかかわる心の性質（基盤としての他者信頼）  
（集団の中に溶け込み、人との関係を作り維持していくための力）  
「心の理解能力」・「コミュニケーション力」「共感性/思いやり」  
「協調性/協同性」・「道徳性」・「規範意識」 など
- 両側面に関わる「感情の制御・調節」  
（異時点間選択のジレンマ / 自他間選択のジレンマ 解決）

# アタッチメントと脳・身体の発達

- 恐れの状態→逃げるための緊急反応
- 心臓・血管・内臓・脳神経系など、身体各所に大きな負荷→効率よく元通りにされないで形成途上の子どもの脳や身体の発達にダメージ
- 「隠れた影響経路」 (→hidden trauma : e.g. 被虐待児等)  
アタッチメントが神経-生理学的側面に及ぼす影響
  - e.g. HPA軸 (Hypothalamic-Pituitary-Adrenal axis)[視床下部-脳下垂体-副腎皮質系]
  - SAM軸 (Sympathetic-Adrenal-Medullary axis)[視床下部-交感神経-副腎髄質系]
  - 海馬, 左半球, ミラーニューロン…/ 心血管・内臓・内分泌系…
  - ストレスセンサー / 恒常性 / 概日リズム / 免疫機能 etc.
- 12・18カ月のアタッチメント→32歳時の身体的健康(Puig et al. 2013)  
→成人期において幼少期の不安定群は安定群の4倍の身体症状を訴える

- アタッチメントとは恐怖管理・安全確保のための心身の仕組み (特定他者に「くっつき」を通して定常状態回帰)
- 緊急反応状態(恐れ・不安)から平常状態への回復(ホメオスタシス)を可能にする中で、脳神経も含めた心身の健康な発達が支え・促される
- 恐れ・不安時に特定他者に確実にくっつける経験を基に、その他者は「避難所・基地」化し、危急の際には、そこに近接できるという見通しに支えられて、子どもは自律的に探索行動を起し、主体的に遊び/学ぶ
- 乳幼児期のアタッチメント→成人期に至るまでの対人関係なども含めた家庭内外での心理社会的適応性および内在化・外在問題や種々の精神病理などがある程度、予測:また時間が経過しても、その影響力(効果量)はさして減衰することなく、長く持続する傾向がある(Sroufe et al., 2005)

# “alloparenting”の役割

-乳幼児期からの家庭外経験の重要性-

- J. Bowlby理論の中核的仮定

- 「モノロピー」と「階層的組織化」(1つの関係から他へ)

→ child care policyに多大な影響(e.g. Rutter, 2008)

園環境・内容・政策等の方向付け(e.g. 担当制)

施設養護の多角的改善・家庭的養護(里親等)への移行

離別親子・虐待等に関する法的対応・措置 etc.

- しかし近年、この仮定に批判的な見方が強まる

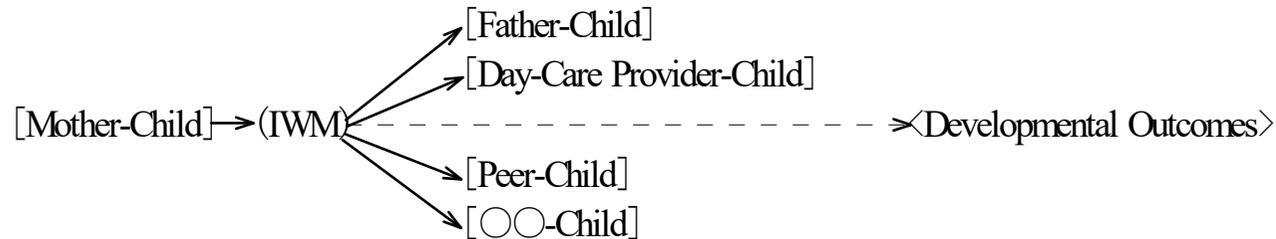
・社会的ネットワーク理論    ・集団的社会化理論

・Hrdy, S.の進化論的議論→ヒト本来の子育ては集団体制・子どもは元来“alloparenting”に順応し得る

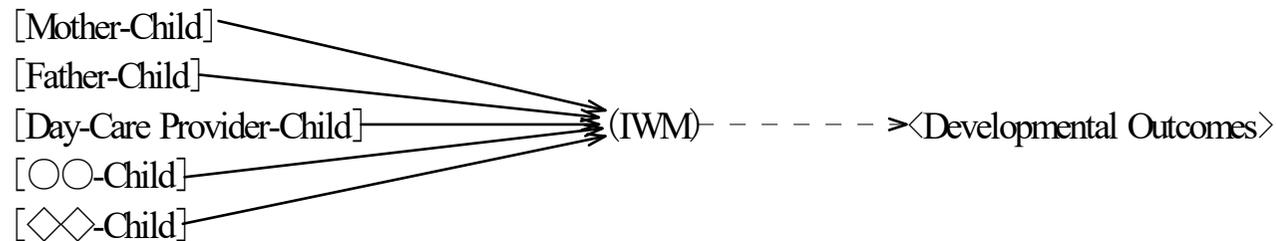
- 「統合的組織化」「独立並行的組織化」への注目

# ◇ Three Models of Attachment Organization

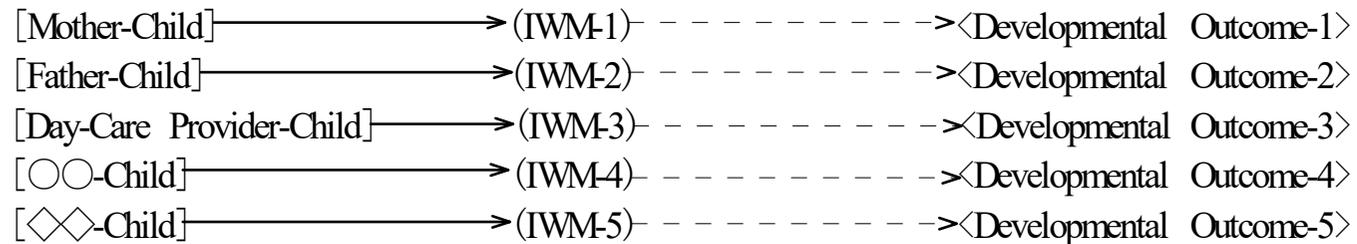
## 1) Hierarchical Organization Model (階層的組織化)



## 2) Integrative Organization Model (統合的組織化)



## 3) Independent/Parallel Organization Model (独立並行的組織化)



◇アタッチメント理論の本流→階層的組織化モデルを仮定

しかし、実証的データはその妥当性を疑いつつある  
[母子関係]と[他の大人-子ども関係]のアタッチメントはさほど一致しない

◇統合的組織化（複数他者との関係の統合）モデルを支持する証左

van IJzendoorn et al.(1992)のオランダ・イスラエルのデータ  
母子関係よりも母子・父子・保育者等と子の合算愛着係数→年長時の適応を予測

◇独立並行的組織化（複数関係個々が特異な機能）モデルを支持する証左

Howes et al.(1998)の縦断研究(~9歳):  
最初の保育者と子どものアタッチメント関係  
→母子関係以上に、その後の子どもの対保育者、対教師関係を予測

Howes et al.(1997), Oppenheim et al.(1997):  
保育者と子どものアタッチメント→仲間関係における社会的コンピテンスを予測

◇**発達早期：自らは選べない強制された関係性が中心→ “niche-picking”**  
**（内的作業モデルに沿った関係の選択）稀少→独立並行的組織化**

**ただし、加齢→“niche-picking”増→統合的組織化→階層的組織化**

## ● 行動遺伝学から見るアタッチメント

- 行動遺伝学:一卵性・二卵性双生児等のデータに基づきながら、心身の様々な特徴(表現型)に現れる個人差が、一人ひとりの遺伝的差異(遺伝子型)によって、また成育する環境の違い(「共有環境」→主に家庭での親の性格や養育による影響:「非共有環境」→主に家庭外での親以外の他者からの関わりや経験による影響)によっていかに説明されるのかを%で算出
- 乳幼児期のアタッチメントの個人差に関わる「遺伝率」  
はきわめて小さい = 大半が環境の違いによって説明される→子どもは自ら親や被養育環境を選べない
- 「共有環境」の違いによって説明されるところとほぼ同等か、それ以上に「非共有環境」によって説明されるところが大きい→親以外の他者やその時々々の環境の特異性の影響も受けやすい

## アタッチメント対象としての保育者・教師

### ◇主要なアタッチメント対象の条件

- ①身体的・情緒的ケアを十分に付与すること
- ②子どもの生活において連続的かつ一貫した存在であること
- ③子どもに対して情緒的投資を行うこと



◇保育者・教師は全要件を充足＝子どもの主要なアタッチメント対象  
→しかし、保育者・教師と子どもの関係の重要性は過小視されてきた

# 「二つの社会的世界」に生きる子ども

- 家庭と園のコミュニケーション・連携・相互信頼はきわめて大切
- しかし、園は家庭とは子どもにとって異質なところであることの積極的な意味を忘れない
- 保育者や教師は子どもにとってもう1人の主要なアタッチメント対象になり得る
- 家庭でのハンディキャップを園は十分に補償し得る

→ 園環境での経験は特に集団状況での適応に寄与

そこでのアタッチメントは特に園や学校等の集団生活の中で、いかに円滑な人間関係を持つことができるか、どれくらい楽しく過ごせるかななどを予測

- **米国NICHDによる大規模縦断研究**
- 早期からの保育所入所の有無それ自体は子どもの発達に差をもたらさない:より重要なのは、早くから入所した場合に子どもが経験する保育の質がいかなるものであるか
- 短期間での頻繁な通園環境の変化・質の低い保育・長時間保育等が、殊に家庭内での親の低い敏感性と組み合わせられた場合に、子どもの発達に負の影響が及ぶ
- 観察ベースで多面的に捉えられた保育の質(子の正負様々なシグナルへの敏感性・子の活動へのポジティブな注視・子の認知活動の促進・子の活動への非侵害性など)が、子が成長し、児童期・思春期になった時点での認知・学業水準や外在化問題行動(他者への攻撃性等)の低さなどを予測
- 英国におけるEPPE, EPPSE, REPEY、SEED調査→質の高い保育(“Sustained Shared Thinking”等)がその後の子どもの認知・非認知両側面の心的発達に正の効果

- 「子育て」支援の前に「子育て」支援を！
- 「子育て」支援（保護者支援）＝家庭の養育機能回復・向上を通して、「子育て支援」（子どもの発達支援）を充実させるという道筋だけでは、もはや立ち行かない事態が生じてきている
- 子どもに直接、届く形で「子育て支援」を高度に支え促す方途の拡充こそが喫緊の課題
- その方途の開拓・充実において、**園および保育者が果たす役割はきわめて大きい**
- 園は現代における「**集団共同型子育て**」の中核的役割を実質的に担い得る

## ヒト本来の子育ての形は「**集団共同型養育**」

- ヒトの子どもはきわめて脆く、しかも重たく生まれつく
- 「乳児期」(哺乳期)の後の「子ども期」がきわめて長い  
→養育負担の増大・長期化  
ヒトの子どもは手がかかる、長きに亘って手がかかる
- 母親単体での養育は生物学的に見て土台、無理  
→ヘルパー・サポーターの絶対的必要性  
→「繁殖協力」/「集団共同型子育て」の進化
- ヒトの子どもは本来、多様な他者からなるネットワーク  
(多層のセーフティネット)の中にあって健全に発達
- ヒトの子どもは元来、複数の他者からのケアに適応

- 本来、「**集団共同型子育て**」は、血縁・非血縁者との多様な関係性に支えられていた
- **タテ**<sub>(対大人)</sub>の**関係**/**ナナメ**<sub>(対異年齢)</sub>の**関係**/**ヨコ**<sub>(対同年齢)</sub>の**関係**
- **集団社会化理論**: 子どもは濃密な子ども同士の集団生活の中で「**同化**」と「**差異化**」を経験
- 「**同化**」→社会のルール・常識・慣習・文化等を習得
- 「**差異化**」→自身の個性を自覚し、独自の可能性を模索
- 現代日本→少子化・家庭の孤立化・遊び場の減少・・・
- とりわけ乳幼児段階の関係性の希薄化が深刻  
→意図して多様なタテ/ナナメ/ヨコの関係性を子どもが経験できる場と機会を設ける必要性→未就園児への対応も含め、今後、**園が果たし得る役割は大きい**